

2018年注目の天文現象

桑田直宏

①1月31日 皆既月食

冬の透明度のよい時期に、天頂に近いかに座付近で月が皆既になるという非常に条件の良い月食です。皆既日食はドラマチックですが、月食は日本でも毎年のように見ることが出来るので、双眼鏡で観望する程度でしたが、2011年12月の皆既月食は7.6cm屈折望遠鏡に双眼装置を付けて観望してみたところ、その美しさは今でも忘れられません。今回は双眼装置観望と撮影に挑戦します。

②7月31日 火星大接近

火星はおよそ2年2か月ごとに地球に近づきますが、火星の軌道が楕円になっているため、かなり接近するときとそうでないときがあり、見かけの大きさはかなり違います。大接近はおよそ15年に1回となり、今年は15年ぶりの大接近した火星を見られる年に当たります。

どのくらい近づくとかというと5759万キロメートルで最大視直径が24.31秒角になります。それでも最大の惑星である木星の半分程度の見かけの大きさです。いかに火星が小さいかということになりますが、火星は地球のように大気があり、実際に望遠鏡で観察すると模様や雲、白い極冠(ドライアイス)が変化するのがわかります。

たぶん、私にとって最後の大接近になる今年に向けて望遠鏡を整備しました。まずは自宅のベランダに設置しているタカハシNJP赤道儀のモータードライブを最新型に交換した。さらに中古で購入したALTER-7N(18cm)望遠鏡をヨシカワ光器でクリーニングと光軸修正、そして鏡筒内部を黒の艶消し塗装をしてもらいました。

日本のシーイングでは、この18cmぐらいが一番能力を発揮する口径だとか。惑星を見るために設計されたこのロシア製望遠鏡でどんな火星を見せてくれるか、今から楽しみにしています。

また、森の宇宙船の主砲である40センチにとっても最初で最後の火星大接近です。夏のシーイングのいい時期だけに、晴れば森の宇宙船に行きます。



③8月12日～13日 ペルセウス座流星群

毎年かならず観測する流星群ですが、今年は月明りの影響を全く気にすることがなく見ることができる年になります。

2017年は播磨自然高原の会員向けに観望会を開催しました。約30の方が集まり、空が暗くなった20時から月が出てくる21時ごろまでの約1時間観望しました。この時間帯はペルセウス座が地平線から昇ってきたばかりで条件が悪かったのですが、いくつかの長経路の派手な群流星を見ることができで皆さん驚いていました。今年は写真撮影にも挑戦します。